

大正十二年七月廿七日第三種郵便物認可  
昭和三年七月廿八日印刷納本

昭和三年八月一日發行  
(毎月一回)

# 山とスキー

第八十四號



札幌 山とスキーの會 發行

◇すまりをて得を讀愛御の下殿宮父秩りよ號刊創は誌本◇

次目號四十八第

.....

記  
事

オリンピアードのスキー競技を觀る

廣田 戸七郎 〔一〕

憶ひ出で深かりしヒュッテンレーベン

廣田 戸七郎 〔二〕

(ノールウエーの記)

丘への生活

館 脇 操 〔三〕

寫  
眞  
版

ルドオルフ・ブルケルト

シエヌングスヒユツテ

昭和三年八月發行



Rudolf Purkert

オリムピ  
アーデの スキージャムプ競技を観る

廣 田 戸 七 郎

二月十八日(土) 晴 ジャムプ競技

空は涼々しく明けた。愈々今日がウインターオリムピアードの花、スキージャムプ競技の日である。

今日のプログラムは、午前中がコンバインド競技のジャムプ競技、午後が純ジャムプ競技と發表されて居た。

私達の仲間では麻生君と竹節君とが午前の競技に、午後の方へは麻生君、伴君が出ることになつて居た。

私は昨晚買ったプログラムを再び出がけに開いて見た。有名な連中の飛ぶ番號を記憶したいと思つて。仲間の連中の飛ぶ順位はもう十五日の抽籤で判つて居たからたゞ其前後と、それに有名な連中の順番をも、もう少しよく知りたかつたのであつた。次に順位を書きませう。(コンバインドの方は伴君が已に詳述して居りますから此處では略します)

(1) Mühwald (Tch.) Willy Dick の代り

(2) Parvo Nuotio (Fd.)

(3) Martial Payot (Fr.)

(4) 麻 生 武 治 (日)

(5) Harald Paumgarten (Au.) 棄權

- (6) Ernst Feuz (Swz.)
- (7) Gilbert Ravanel (Fr.)
- (8) Martin Neuner (D.)
- (9) Erich Recknagel (D.)
- (10) Rolf Monsen (U. S. A.)
- (11) Franz Thannheimer (D.)
- (12) Klébert Balmat (Fr.)
- (13) Axel. H. Nilsson (Sd.)
- (14) 伴 素 彦 (日)
- (15) Luigi Bernasconi (It.)
- (16) Teivo Jarvinen (Fd.) 棄權
- (17) Sven J. Eriksson (Sd.)
- (18) Alf. Andersen (N.)
- (19) Harald Bosio (Au.)
- (20) Bertil Carlsson (Sd.)
- (21) Josef Bim (Tch.)
- (22) Sven O. Lundgren (Sd.)
- (23) Jakob Tullin Thams (N.)
- (24) Alexander Rozmus (P.)

- (25) Esko Jarvinen (Fd.)
- (26) Leonald Lehan (C.)
- (27) Sepp Mühlbauer (Swz.)
- (28) Meritt Putman (C.)
- (29) Gérard Vuilleumier (Swz.)
- (30) Anders Haugen (U. S. A.)
- (31) Stanislaw Sieczka (P.)
- (32) Hans Klepper (N.)
- (33) Gyula Szepes (H.) 乗権
- (34) Joseph Maffioli (Fr.)
- (35) Andrzej Krezeptowski I. (P.)
- (36) Luciano Zampatti (It.)
- (37) Charles Proctor (U. S. A.)
- (38) Bela Szepes (H.)
- (39) Miklos Kazmer (H.)
- (40) Branislaw Czech (P.)
- (41) Sigmund Rund (N.)
- (42) Gérald Dupuis (C.)
- (43) Heinz Hinterauer (A.)

- (44) Rudolf Purkert (Tch.)  
 (45) Franz Wende (Tch.)  
 (46) Alois Kratzer (D.)  
 (47) Bruno Trojani (Swz.)  
 (48) Vitale Venzi (It.)  
 (49) W. B. Thompson (C.)

備考

N. : ノールウエー	Sd. : スウエヂン
Fd. : フイッラッ	D. : フ
Fr. : フラッ	Swz. : スウイ
It. : イタリー	Tch. : チェコ
P. : ポーランド	C. : カナダ
U.S.A. : アメリカ	H. : ハンガリー
A. : オーストリー	

競技會當日

膚吹し、風は流石にピリッと耐える様だが、太陽は温い熱を地上に投げて居た。サンモリッツを圍む山々は朗かな空に晴れやかな顔を映して居る。何と云ふ壯んな姿だ。今日一日の爲のウインタールムピアーデかの如くに、朝からヒツキリなしに人もそして馬橋もケバ／＼しく飾りをつけて、勇み立つてオリムピアシャンツェを目指して連つて居る。シャンツェの直ぐ近くまで馬橋は無論行く、自動車が行くと云ふ仕末、冬の道路とは云へ何の位道がよくつけられてあるかと思ふ。

定刻迄に散々伍々、重いスキーを背負つて道路を歩いて行く各國のジヤムバアの姿が觀衆の行列の間に混つて見える。流石はデイスタンスの第一人者だ、今度五〇籽で一等になつたスウエデンのヘッドルンド、大きなニツカボツカを着て、悠々とラングラウフのスキーを穿いてスルスル滑り乍ら私達の横を歩いて行つた。スキーを穿く方が餘程良いよと云つた様な顔してニコ／＼笑つて居た。

私は處用があつて少々皆より遅れてシャンツェに着いた。

萬國旗がアウトランの周りの柵を圍んで立てかけられてある。一番早く、目立つて日章旗が見える。元氣よく風に揺らいで居る。

午前中は未だ大規模のスタンドは割合にマバラに人の居並びを見る位であつた。

競技に出ないノールウエーの一流處が試験飛びをやつて居る。五六五五七、と云つた風にレコード板が出る。誠に軽々と飛んで立つて行く處は堂に入つたものである。皆相當のスタイルをして飛んで居る。カラーをかけてネクタイをつけて、上衣をキチンと着て、ズボンには綺麗にアイロンをかけて見るからに輕快である。本人も氣持が良いだらうけれど、見て居る方も良い感じがした。

一臺二臺と寄り寄り集つて來た馬橋が、もう競技の半ば頃にはアウトランを少し離れた處に規律よくたくさん並んで居た。

隣り合つて並んで居る馬達が音無しくして居る様は、全く神技に見入つて居るかのやうだ。隣り合せて首すり合つて居る馬達は何を囁き合つて居るのであらう。今朝自分が乗せて來たお客のことでも話して居るのか、それとも何處の國の選手が一等になるだらうなあとでも話し合つて居るのであらうか。之はチイーと話は横道であるが、雌雄隣り合つて居ても誠に音無しい。日本ではよく馬の寄り合ふ處で、馬が騒ぎ出して大騒ぎを演ずることがあるが、さう無暗に西洋の馬達はイキリ立たないらしい。之も時期とをとして訓練によるものであらうかと、とんでもないことを考へた。

ジャンツエの籠へ行つて時計を見ると、もう十時半だ。樂音は勇しくサン、ジャンの森々とそして之を圍む山々に木魂して鳴り渡つて來た。圏外の左側に設けられたスタンドに二十人にも近い連中が、コンダクターのタクトに合せて唸々たる音を奏して居る。さしも喧騒して居た場内もまた、く間に靜肅に返つた。ラウドスピーカーの開會宣言、續いてジャンツエの端に立つ係員によつてガラン／＼と小鐘が打ち鳴らされる。スタート番號の掲示板に音がしてナンバー(1)の文字が出る。壯嚴な氣分は全く此瞬間に今度のオリムピアーデで今日始めて味つた様な氣がした。

前述の様に、今日の大体のプログラムは午前中がコンバインド競技のジャムブ、午後が純ジャムブ競技であつた。

複合競技の結果は、午前中のジャムブの様子でもうノールウエーが優勝することは明かであつた。處が此處に一人多くの

午前のジャムバアの内に光りを發して居たものがあつた。それはチエツコの Rudolf Purkart であつた。

彼が今日あんなに素張らしく落つきのある、そして勇敢なジャムブで光りを放たふとは、自分自身も豫想せず、又多くの觀衆も豫期して居なかつたことであらう。左程に彼の當日のジャムブは誠に調子が良かつた。彼の名は已に私は先年木原氏のお便りによつて知つては居たが、私の記憶には割合に薄かつた様であつた。私は午前中のジャムブで彼の最初のジャムブを見た時、誠に落ちついて、そしてノールウエーの連中にも劣らぬ程強いフォルラーゲをとつて、他の連中よりも一段長く而も鮮かなランディングをして行くのを見て、すつかり感じて終つた。第二ラウンドに上へ上つて來る時、餘程寫眞をとりたかつたのだがとう／＼撮る暇がなくて誠に残念でならなかつた。彼のフライトのフォームは例のストラウマンが此日若し此ジャムブ競技見物に來て居たなら、きつと感じて見て居たに違ひないと思つた。ストラウマンは一九二八年度のスイススキー年報にオリムピアードのことを書くらしいが、若し彼がそれを爲すならば私達は彼の記事中にこのブルケルトを激稱した言葉を見出すであらう。と私が此處に感嘆する程彼の其日の出來榮えが善かつた。恐らく挿畫のジャムブスタイルを見て皆さんは驚かるゝことであらう。午後からのブルケルトの奮闘が實際見物であることは誰しも考へたことであらう。

それにしても此日ドイツ、スイスの一流處が、餘りに榮えなかつたことは何故であらう。

ズーと午後のプログラムとコンバインドのジャムブ競技のと比べて見るとポーランド、フランス、オーストリー、イタリー等の小國が複合競技のジャムブと純ジャムブ競技に掛け持ちの選手を擁して居る位のものでノールウエー、スウェデン、ドイツ、スイス等は殆んど掛け持ちの選手を出して居ない様であつた。

純ジャムブ競技は午前の競技が済んでから小一時間も中食時間があつた後で開始された。

吾々仲間でも麻生君、伴君が出ることになつて居たが、實際の處、到底ノールウエーや其他の一流處の足元にも追ひつき相にもないことは、判り切つて居たものゝ技術の相違は相違としても、吾々には吾々の現在の最善を盡して戦ふて、遠

征の意義が充分達せらるゝ譯である。又そのベストを盡して戦ふてくれることを冀ふて應援の人達は、總勢集つてスタンドの右側の一隅に居並んで居た。

實際私は此日吾々の連中に間違ひさへなければ、精々良い寫眞をとつて、せめてもの土産に仕様と考へて約二百呎ばかり活動フィルムを用意して出掛けた。

午後二時競技開始

カンブリヒテルの席には聯盟會長のホルムクエスト、ノールウエースキー俱樂部の重鎮オステゴールド、スウイススキークラブの會長ダネツガー氏、其他の顔がすなり見えた。

第一番、チエツコの Willy Dietl がプログラムに載つて居るけれど飛び出して來たのを見たら、どうも違ふ様だ、後で Willy Mohwald であることが判つた。餘り飛んだ様でもなかつた。レコードが四十六米と出た。最初飛んで立つた勢であらう拍手が彼方此方から湧く。

次がフィンランドの實 Pavo Nuotio が割合に穩かに五〇米飛んで立つ。

次にフランスの Martial Payot が四〇米練習の時は随分危いスプリングをして居たが今度は又彼にしては見事なジャムプ振りであつた。流石はノールウエーのコーチヤーに従つて習つた丈物になつて居たと思はれた。次いで麻生君が午前よりは元氣を増して三七米飛ぶランディングして暫らく滑走はしたが *Fobergen* (圏外) に出ぬ前に轉んで終つた。どうして今日は體が遅れて居るのか、午前の轉倒でヒドク臀を打つたのが耐えて居る様で全く残念だ。何しろサンモリツツの大會で一月二十三日に五三米飛んで立つて居る位だから何時もの元氣とコンディションにあつたなら、きつとよい成績をあけたいに相違ない。

次にスキスの Ernst Feuz フランスの Ravanel が飛んで、例の Wunder に出て居ると言はれて居る M. Nenner (ドイツ) が飛ぶ。随分元氣よく空中に飛び出したやうだが、でも五〇米以上にならず。次いで同じくドイツの優秀な選手

Erich Recknagel が飛ぶ。Pontesina の大きい臺で練習して来た割合に遠くへ飛ばない。安定は安定であつたが、僅か四八米。次にアメリカの R. Mosen (ダートマウスカレッツ) は美しく飛んで行つた。そして是迄の最長五三米を作る。それからドイツの F. Thannheimer が四六米半。フランスの H. Balmat 四七米スウェーデンの Axel H. Nilsson が五三米。何れも勿論轉びはしない。

次いで伴君が来る。サツツの工合も良かつたがランディングで體が後れて轉倒して終つた。何のことはないスキーは折れて終つた。かけ代へを買ふにも町へ行つて買つて来るには時間がかゝるし、さうかと言つて折角のオリムピアード、もう飛べなくなつて歸るのも彼自身も残念であつたし、亦私達も大へん氣の毒でならないし幸ひ體には異状がなかつたからそれに麻生君とは幾分番號が離れて居たので麻生君が二回目を飛び終つたならそのスキーを借りて飛ぶことにした。伴君が此處で棄權をしてくれなかつたことは人事ならず私は本當に嬉しかつた、悲喜こもも／＼到るやうな氣がした。然し麻生君のスキーを借りるとしても到底正しい順番に飛び得られないから遅れて飛びたいといふので早速私は審判者に交渉した處よろしいといふ快諾を得てやつと安心して吉報を伴君に告げ休息す。

次いで國籍問題にひつかり相なスイス育ちの伊太利選手 Bernasconi が四六米それからスウェーデンの Sven J. Eriksson 五二米を飛ぶ。

次にノールウェーの Alf Andersen がとても體とスキーと調和のとれた姿勢を以て見事に飛ぶ、グン／＼前にかゝつてランディングの時に頭が地面につきやせぬと思はれる程になつて見事に六〇米の處に落ちた、ピクともせず圏外に易々と滑走して行く。此處で今迄の最長記録が作られた譯である。腕を決して早く廻轉して居らなかつた次に飛んだオーストリアの H. Posio が又餘りに優者に比してレコードが少い三六米半。

次いでスウェーデンの B. Carlsson が五一<sup>1</sup>/<sub>2</sub>米、チエツコの J. Eini が四九<sup>1</sup>/<sub>2</sub>米、此邊に大豪がひかへて居たのであつた。次のスウェーデンの S. O. Lundgren も北歐ジャムバーの例に洩れず非常な前傾姿勢で飛ぶ、然しレコードは伸

びなかつた四八米、次が優勝候補の第一人者 Jacob Tullin Thams 今度も亦此大會での優勝者かと思はせる程軽々と落つき拂つて例のタムス型で型にはまつた様に飛んで立つて滑つて行く。然し彼の姿勢は此前のシヤムニイの時より体全体、即ち腰から下の方の前傾も可成り多くなつて來た様に思はれた。距離が五七米、A. Rozmus 四一米、Thams の後に続く連中はなか／＼に $\alpha$ の $\beta$ を考へて見事に飛ばないと $\alpha$ の $\beta$ の良い特點を得ることは困難であるであらう。Ede Javinen 四五米。次いで兎も角もスキスで五指に數へられて居る良き $\alpha$ の所有者 Gopp Mihbauer 君が五二米飛んで綺麗にスキーを揃へて立つ、彼は體のガツチリとして居る點でもジャムプで $\alpha$ の點が良くなりさうだ。

彼はスキーを完全に揃へて飛ぶ爲にラングリーマンを使用して居た。

彼は一月二十三日のサンモリツツの大會の時に六九米を飛んでランデング斜面の軟い處に落ちて轉んで、足を痛めて随分閉口して居たが、それでもその後一日に二回は必ず此シヤンツエで練習を怠らずに飛んで居た。次に續いてスキウスの第一人者 G. Vuilleumier がスタートに顔を出した、彼のクロウチンダウンは低くはない。スウーとシヤンツエから離れたと思ふ。割合に腰が高いとグンと腰から上を前に屈して、落ついて兩腕を廻轉し乍ら兩足を開いて餘り綺麗でないランデイングをして立つて行つた。レコード五七米。

次に出たスタート番號が三〇プログラムを見るとアメリカの例の Anders Høgen である。もう名前は僕達には知り過ぎる位になつて居る。ノールウエー仕込みの低いクロウチンダウンでよく兩足は揃つて滑つてくる。サツツは大して強いやうでもないが五一米飛ぶ、老いたりとも雖もにくらいしい程落着きを見せて居る。大會が終了して感じたことであるが今度の出場者中で一番落着て居たと思つた。

それからポーランドの Stanislaw が四〇米。

次にノールウエーの Hans Kleppen 彼は補缺として最初やつて來たのであつたが練習中大へんよくなつて、正選手として出ることになつたらしい。凡べての觀覽者の緊張した瞳が集る。然し今日は練習の時程でなかつたそれでも五六一二を

飛んだ、サツツで體の搖れたのか、大へん空中で蕩搔いて居る様が見えた、體が左に傾いてランディングして間もなく倒れて終つた。

こんなジャムバーも来て居ると言ひたいやうなジャムバーが次の J. Maffioli (オーストリー) であつた、レコード三五米。

それから A. Krezeptowski I (波蘭) Luciano Zampatti (イタリー) Charles Proktor (ハンガリー) Mikros Kazmer (同上) Bronislav Czech 等のジャムバーの順番が過ぎてオリムピアの Sprung Konkurrenz 優勝候補 Sigmund Raud の番が来た。

若し今日第一位がノールウエーであるとしたなら Thams か Raud であらうとは已に噂になつて居た。とても低いクロウチングダウンの滑走姿勢をとつて兩手を前方に差し出して滑つて来る。シャンツェの先にスキ一の尖端が來たと思ふと、それを鳥の様に高く飛んでグングン空中で前へかかつて行く。實際彼も亦ランディングで頭がスキーにつきさうかと思はれる位前に上體をかけて居る。レコード五七 $\frac{1}{2}$ 米ブラボーの聲は天を憾かす。次いでカナダの Dupuis が四九米。次が午前を通して今日のジャムバーの内でも可成の成績位置に入ると思はれたチエツコの Rudolf Purkert がスタートに出て居る。體は大して肥つて居るとは思はれない。が相當に丈は高い。體の釣合が大へんよくとれて居るやうだ。

スキーをよく揃へてグングン前へ傾いて行くのが本當に機械の様だ。完全にノールウエーの人達と同じ飛び方である。五七米午前に倍して彼にブラボー! の聲が湧いて来るやうであつた。次のチエツコの Wende が飛ばない。棄權らしい。Alois Kratzer が四九米、それから例の Trojani (スイス)、Straumann の理學的の實驗と同じに飛ぶのが此 Trojani 一人だ相だがどうしたのか去る日の Pontresina の時の様に出來がよくない、と云つても四八米 $\frac{1}{2}$ ではあつたが物足りな感じがした。

最後にイタリーの Virile Tenzl 私達の仲良しだ。彼は大變此オリムピアードで元氣が良かった。

コルチナに居た時も元氣はあつたが五〇米以上飛ぶとどうも危しかつたが此處のオリムピア・シャンツェへ來てからは

大へん技が進んだやうだ。練習の時に六九米をフツ飛んで居た。今日も午前中相當の出來榮えを見せたし今も亦五〇のレコードを出した。日本で云ふと體操學校でも出たやうな良い釣合のとれたそして良く器用に體を使ふ方である。

此第一回のラウンドが過ぎて第二回目に入る時にスタートを上げる上げないで議論があつて約半時間を費した。争は午前十と似たものだが今度は仲人役の Anders Engen が折衝しなかつたと見えて時間がかつたのであらう。

ノールウエの讓歩でスタートは中段より少し上に決まる。二回目は皆のジャムバーが一回目よりレコードを出して飛んだ。フィンランドの Mnoie がもう午前中に二回飛んで、又午後二回飛んでしかも二回目に五六米を出したことは驚嘆した。彼が Kombinert の Läufer として優れて居ることは少し眼のある人は推量出来るであらう。彼はとうとう二月二十四、二十五、二十六のドイツの Feldberg に於けるドイツの選手權大會でコムバインドの第一位となつてドイツの選手權を獲得したと新聞は報じて居た。

麻生君は二回目には第一回目よりは樂に飛んだやうであつたが、又もランディングして平地に出る境の處で後ろに倒れて終つた。全く氣の毒でならなかつた。

續いてスウイスの Feuz が五八米 $\frac{1}{2}$ 、ドイツの M. Krenner が五七米と云ふ調子でどんくレコードが伸びて來た。遂に Erich Recknagel (ドイツ) は六二米のレコードを出したが然し惜しく Diering で轉倒して終つた。彼は已に一月十五日の Pontresina の Stprung Konkurrenz で一等を得て居るだけになかなか頑張り屋である。誠に此レコードで倒れたのも惜しいことであつた。

R. Monson 第一回目より調子よく五九米 $\frac{1}{2}$ を飛ばす F. Thannheimer (ドイツ) 五五米 $\frac{1}{2}$  Balmat (フランス) 五一米 A. H. Nilson (スウェーデン) は又物凄く踏み切つて力強い空中の兩腕廻轉を以て六〇米のレコードを出す。Bernasconi (イタリー) 五九米。

實際の順番では Bernasconi の前に伴君であつたけれど順番を遅れてスタートすることになる。

レコードが伸びて来ると共に飛行が實に痛快な程そして勇壯な勢で各ジャムバーは次々と飛んで来た。

スウェーデンの Sven J. Eriksson は又六二米<sup>1</sup>/<sub>2</sub>といふ素晴らしいレコードを作つた。なかなかランディングのシヨックが強さうである雪が堅過ぎる位堅いので少しでも體が遅れて居ると後ろ轉んで終ふ。續くノールウエーの Alf Andersen も亦文字通の型にはまつて居る理想的の姿勢で六四米を鮮かに飛ぶレコードが實際何處まで延びて行くのか一向見當がつかなくなつて終つた。競技に關係ある人達ばかりではない見物人が凡べて異様に緊張して來た。

スウェーデンの Carlsson が又六一米のレコードを出す。

Bim (チエツコ) 五一米 Lundgren (スウェーデン) 五九米。

次がノールウエーの Tullin Thams.

彼は改められた上のスタート臺からスタートした。空中に出ると見る間に今迄他のジャムバーに見られなかつた程高く空中を游いで居る。そして得意のタムス型で、前に體をかけて下の斜面を一生懸命に睨み返し乍ら、然し腕の廻轉は可成り早く、そして流石慌てゝ居る感があつた。スキーも平行はして居たがピツタリと揃つて居ない。

ランディングの時には可成り體が左に曲つて居た、可成り大きいシヨックと共に着陸すると間もなくひどく前に轉け込んだ、もう實際平地の *Tiberung* と思へる位の處に落ちた。シヨックの強いこと、そして立上りの困難さは想像に餘りある。實際ひどい轉け方をしてしまつた。前にのし込んで頭を斜面に突きつけて一回轉しかけて横なぐりに斜面にもう一度轉り込んで一瞬時人事不省に陥つた。心配したノールウエーの應援隊選手達はかけつけて介抱しながら休養所に連れて行つた、ランディングにカメラを向けて居た私も此有様を見て思はずレンズをそらした。ただどうなつたかと氣の毒に思ふと同時にジャムプの本質そのものが、距離に重きを置くことの非を充分感じた。危険を怖れてばかり居てスポーツは發達せぬかも知れないが、スポーツの發達をはかる爲に必ずしも危険を強ふる様に思はれる危険をさせるのは返つてスポーツの發達を妨げるものであると思つた。

實に此時の Wunderbar Rekord は七三米であつた。タムスが此レコードで立ち得なかつたとしても、今日スタートを上  
に持つて行くと甚だ危険であると言つたノールウエーの主張を彼は充分證明したやうに思はれた。

同じ處から出て来て已にサツツの旨いの上手なのでは二〇米の開きがある。その開きを始めから知つて居るノール  
ウエーの選手達は未だ々々他國の選手に比して一等地を抜きん出て居ると思ふた。

又も此オリムピアードのジャムプではノールウエーが優勝することはもう練習の頃からの狀況で判つて居た。ドイツの  
言葉で Schneeklich といふ言葉があるが誠に此タムスの飛んで轉んだ時の様は此感を深うした。

ポーランド Rozmus 五三米フィンランド Jarvinen 四七米スイス Sepp Mühlbauer 五八米續く Vuilleumier 何時もの  
調子で何となく落つかなく飛び出すグングン前にかゝつてやつて來たと思ふ六二米邊で地面につく、同時に兩スキーが開  
いて兩脚の間に入つて一廻轉トンボ返りをして前に轉け込む、得意の立つてから後ろを見て兩手を打つて残念がるキザさ  
を現す暇もあらばこそシホラシクも恥し相に退いて行つた。

And. Haugen 五三米ポーランド Gieszka 五八米ノールウエー Keppen 六四米(轉倒)。

それから數人五〇米臺を飛んで愈々 *Grand Round* となるタムスに劣らず、勇敢な彼も亦凄いレコードを作るかと見  
えたがタムス程は行かなかつた。それでも六二米<sup>二</sup>飛び方も樂相に落ついて飛んで行つた。

Punkert が五九米<sup>一</sup>未だ一人残るスイスの第一人者 *Prigiani* も此時とばかりに良く空中に飛び出す、成る程彼の飛  
び方にも落つきはある、そして空中での空氣の抵抗を旨く利用しながらスキーを支へて行く處は堂に入つたものである、  
が然し此二回目には彼は些かスキーが不揃ひであつて着陸でテールが地に觸れると間もなく、横に投げ出されて終つた。  
是でスプリングではスイスの旗は到底掲揚さるべくもなさ相に思はれた。

イタリーの *Venci* が五九米飛んでそれから伴君がそれでも三九米を樂に飛んで立つて今日のジャムプの幕は閉ざされた

ジャムプ成績

(1) Alf Andersen (N) 19,208 成績

(2) Sigmund Rund (N) 18,542

(3) Rudolf Parkert (T) 17,937

(4) Axel H. Nilsson (スウェーデン) 16,708

(5) Sven Lundgren (同) 16,687

(6) Rolg Mønsen (ノルウェー)

(7) Sepp Mühlaner (オーストリア) 16,458

(8) Ernst Feuz (同) 16,458

(9) Martin Neuner (ドイツ) 16,291

(10) Bitil Cullsson (スウェーデン)

(36) 伴 素 彦 (日) 4,000

最長不倒 Andersen 64米。

かくて午後四時過ぎ、さしも壯んにして華かなりしオリムピアードのジャムブ競技は終了した。

観衆は何となく物足りなさを感じて居る様に、すぐ歸途につかうともしない。そちこちに未だ何等か囁き合ひ乍ら番外のジャムブでも見たい様な顔をして居た。

私達は已に此競技會の前にコルチイナ、クロステルス、ポントレシイナ、それからサン・モリッツ等でスキーのジャムブとは斯ういうものかと云ふ新しい觀念を持つことが出来て居たから、別に此度の競技を見て驚きもしなかつたけれど此處に此日あくした凍結した様なジャムピングヒルのコンデイションにも怖けずに勇敢に飛ぶ様を眼のあたり見て、充分スキージャムブなるものの本質をつかむことが出来た様な気がした。

そして同時に日本のジャムプのやり方と外國のジャムプのやり方は、成る程此處に相違點があると云ふことを、何うやら見出し得た様な氣がして、少からず嬉しかった。

私はこんなことを考へた。

私達は、是迄本やそして寫眞などで、クローチングダウンとは可及的アプローチで低い姿勢をもつて滑つて行くものでサツツとは強く踏み切つて体を思ひ切り伸ばして空中に前下方或は前上方に投げ出して行くもので、空中では出来るだけフオールラゲをとつて、着陸では出来るだけ前にかゝつて体の安定をとつて、滑つて行くのであると云つた様な概念は可成り得て居た積りであつた。そして夫等の各動作について「あゝであらうか、かうであらうか」と苦心して今日の程度まで漕ぎつけて來たのであつた。

然し今度遠征することによつて、全く私達の見たジャムプは、私達の想像して居た以上であつた。特に最も相違して居ると見た處は、サツツの方法であつた。

素張らしく強いサツツの動作。

一口に言ふと私達の仲間の今迄やつて居たサツツの方法は生ぬるいサツツ、音無しいサツツ、さう言つた言葉で現せる何故サツツが音無しくなつて終つたか、それは過渡期の一つの進む道に進んで行つたのであると言ふべきだと思ふ。私達には今迄ジャムプと言ふもので立つことが随分の苦勞であつた。私達は立たんが爲に苦心をして來た。

其爲に自然サツツが緩かになつた様に思ふ。之は決して道を誤つて進んだものと一概に言ふことは出来まいと思ふ。それに又競技のルールがさうした傾向を生ましめたことも、決して否定することは出来ない。然しさうした道をとつて、今日の程度に進むことが出来たかとも思ふ。無論さうした道をとつて來たことにも長短所もあつたであらうけれど、今日の様にスキ一のジャムプを多くの人達が行ふ様になつたことに少くとも都合の良かったものであると思ふ。

今の日本の人達は去年のシーズン中に何れだけ強く踏み切るサツツを練習して休得したかは私には判らないけれど、恐

らく私達が今度向ふへ行つて見せつけられた程度までには未だ漕ぎついて居らないだらうと思ふ。

と言ふ様な思ひ切つたことを言葉で現す程、私達の眼には向ふのサツツの方法と日本で今迄見て居たサツツの方法とに大きい展きがあつたことを感じたのである。事程向ふの所謂ジャムブのサツツは強い、本當に力一杯なのである。と同時に此サツツの氣持や動作は全く言葉による抽象的の現し方では説明が出来得ないし、又理論で考へたり理論を讀んだりしただけでは呑み込み得ないのは當然だと思つた。たゞ實際多くの人達にやつて見て貰つて、見たもの出来るだけ近い様にして行くより方法がないと私は思つた。漫然と見た時の私には全く向ふのサツツの氣持は、ランニングブロードの踏み切りの氣持と一緒に思はれた。無論動作の細に涉つて考へるならば、幾分の相違はあるであらうけれど。

スキーの尖端がシャンツェの端に出た時が本當の踏み切りの時間であつて、此時に踏み切りの凡べての動作が集中せられて、敢行せらるゝことは體かである。そしてその踏み切りを有効にする爲に其以前の瞬間で已に踏み切り動作に入るべき補助動作をとる選手も可成りある様に思つた。

例へば兩腕を軽く後ろに引く者、より深いクローチングダウンに移つて来る者、思ひ切りクローチングダウンで腰を低くして來たのを上体を前傾動作に移して最後の踏み切り動作をとる等、矢張り其處に多少の相違はある様である。そして最後の踏み切り瞬間には、殆んど全部の選手が可成り強く踏み切つて居る。アプローチのスピードだけを利用して空中へ遊び出るといふスウイスの選手達でも相當踏み切つて居ることは體かであると思つた。たゞスウイスの連中はノールウエー系の連中に比して踏み切りの力が弱いのであつて、決して全く踏み切つて居らないことはない。その踏み切りの最後の動作は、兩腕の前上方振り出し、体全体の前斜上方への突き出し、此時上体は下体に比して強く前方に突き出さる様な氣がする。下体を強く伸ばすこと、これ等の動作が全く殆んど同時に行はれて、そしてそれが何れも前方へ強く、と云つた氣持で兩足底全体乃至は爪先での強い蹴りで空中に躍り出る様な氣持に見えた。そして必ず此サツツの最後の動作では体が前斜して張り切つて伸びて居る。

体のフォアラードのこと。

体を前傾することの有効なことは、已にストラウマンテオリーで證明せられて、遠距離飛行の爲に、又空中飛行の合理的体勢として已に認められ、そして必要なことであると云はれて居る。

このフォアラードの素張りしい格好も私達はサツツの動作と一緒に、此度始めて見て驚き、そしてそれが想像以上のもも少くないことを知ることが出来た。

私は日本に居た時からこのフォアラードのことは、可成りア、であらうか、であらうかと仲間の連中と研究し合つて居たけれど、一体何れの瞬間にさうした体勢に移つて行くものであらうか、といふことがたゞ一つ頭に残つた事であつた今度向ふで見たのでは、ジャムバアが臺から離れるといきなり随分強い、(多分四〇度位あらう)前傾をとつて其体勢を保ち乍ら飛行して行く選手もあつた様であるけれど、多くは空中飛行の三分の一位出てからゲン／＼前に掛る様である。そして飛行中に上体と下体と大抵が或角度をなして前傾して居た様であつた。例のタムスが七三米飛んだ時の空中寫眞で空中飛行の半分過ぎ位の處に止つたので上体と下体の角度を測つて見た處、ほゞ三〇度の角度をなして居た。そして上体は水平線と殆んど平行位に持つて行つて居ることを知つた。

ブルケルトの寫眞では矢張り上体と下体が御覽の通り可成りの角度をなして居る。

スキートの操作は体勢と調和して行くことが最も大切なことであるが、シャンツエを離れるとノールウエーの連中でも水平か乃至は少し上向きになつて運行される様であるけれど、他の連中はもつと上向して居る様であつた。然し大抵の選手は空中飛行中、体のフォアラードに伴つて次第に下向して行つて居る。そして着陸に近づいて行くと、殊に私の眼についたのであるけれど、ノールウエーの連中の殆んど皆が、斜面に全く平行にスキーを持つて行つて着陸して行くのを見た。テールから着いて行く様ではいけないと連中の或選手が私に聞かせたことが、うなづかれた。

空中飛行の半ば乃至は其前後で調和のとれたフォアラードの寫眞を見ると、旨い連中の体勢はきつと全体の重心が前に

あるのを知る。そして丁度その姿勢は上の方から糸で釣り下がつて浮んで居る様に見える。重心が前に行つて居るから、例へば、足元で糸で釣るすと前へ轉り込んで行く様に思はれる位に見える。若しもスキーが上向して体のフォアラゲが少いのには、足元で釣るしたら、少しも前へ轉り込んで行き相に見えないだらうと私は思ふ。

兩腕の廻轉が此フォアラゲとスキーフェウルングとに調和を支へ爲に可成り大きい補助運動であることも慥かに私はつかみ得たと思つた。コセ／＼と早く廻轉する様では、そのジャムプが立てないことを示して居る様である。

稿を閉づるに當りて。

又何處かで二度も三度も次の様なことを書くかも知れないが、之は痛感したことであり、是非是からのジャムプにさうあつて欲しいと思ふことがある。

それは、私達が是迄歩んで來た道をよく振り返つて、そしてこんなことを考へて見たいと思ふ。

私達の日本のジャムプは、今迄フォームを作ることに苦しみ、立つことに腐心して來た。そして私達の今日の基礎を作つた。それは前にも言つた通り、決して損な道をとつたのでないと思ふ。たゞ今後のジャムプでは、その道に捕はれない様に、私達は進んで行きたい。私達更に一步新しい道に進み入らねばならないと思ふ。

私達が是から進む道は他にはないと思ふ。それはサツツの跳躍の改良と空中のフォアラゲの研究とにある様に思ふ。此處に踏み込んで行かなければ到底日本のスキーでジャムプは國際的に追つ附き得ないと思ふ。私達が日本のスキージャムプを國際的に持つて行く爲に、是非々々此處に多くの日本のジャムバア諸君に全力を傾注して欲しいと私は望みたい。

と同時に少くともジャムプでは最初から餘りにフォームにばかり捕はれて伸びるべき性質のジャムプを縮めて終つてはいけないと思ふ。

成る程國際では、無暗にレコードを目指すことを避けて専らスタイルに重きを置くべき協約が成り立つたとは云へ、そ

れは少くとも未だ現在の日本の程度にすぐ取り入れることはどうかと私は思ふ。

其理由は明かである。スタイルに重きを置くことにすると、必ずそのことに捕はれて終ふと思ふ。その結果は無暗に立つことに腐心する様になると思ふのである。

私は大膽にもかう叫びたい。スタイルの美醜は第二の問題否末の問題として、醜なるスタイルでも良い、兎に角サツツとフォアラゲの大改良に勇敢に入つて、物にして欲しいと。

そしてそれから追々と諸部分のスタイルの改良を行つた方が良いと思ふ。而もそれで充分出来て行くと思ふ。實際の處、今のノールウエーやスウエデン邊りでは、もう私達が今やらうとする時代を私達より一廻り前の時代にやつて来て、そしてその要領が掴み得て、そこでより以上に理想にスタイルを近づけやうとして居るのである。

而もサツツの練習とフォアラゲの研究は、決して大きい臺を必要としないとは、ノールウエーの一流が言つて居るのである。勢々二〇米前後飛べる程度のもので充分なのである。

私は私達が見た向ふのジャムプサツツの動作とフォアラゲの体勢とは、實際私達の想像以上に物凄いいものであり、そして此充分なる研究によつて、是迄の各地のジャムプ臺で作られて居るレコードは、優に一〇米は伸び得る、少くとも五米は伸び得る（勿論臺の規模にはよるけれど）ことを附記して切に此兩方面に向つて多くのジャムバア達の研究が進まんことを望み、そして纏りのなかつた此稿に私の責を終りたいと思ふ。（二八、七、二〇）

# 憶ひ出で深かりしヒユツテンレーベン

(ノールウエーの記二)

廣田戸七郎

## シエヌングスヒユツテへ

オスローに着いて漸く一落ち着きする暇もなく、私達は其明けの日(廿六日)オスローから約廿五籽あるノールウエースキークラブ所屬のスキーヒユツテへ行くことにした。

そして其處で僅かの日数ではあるがミツシリ習はうと云ふ譯であつた。

ヒユツテの名を „Skjennings byta” と綴つてシエヌングスヒユツテと云ふらしい。向ふの人の口から出る音が、さういう風に響いたから、私達はさういう發音で口に出して居た。それで向ふにこつちの發音でそのヒユツテの意味が通じて居た様だから、大して間違つて居たものでもないらしい。

私は、午前銀行に行つて用足しした。他の人は運動具店に行きスキー用具を買ひ整ふ。

午後も三時過ぎ頃であつたかと思ふ。例のオルセン君とすつかり僕達と仲間になつちやつた、ハイベルグといふ學生とが案内に来てくれた。

餘計な荷物はホテルに預つて貰つてリユツク二つ、手下げ鞆二つと都合四つの荷物に一行の分を纏め、竹節君はジャム



冬の日曜日のシェヌングスヒュツテ

ブのスキーを一臺持つて行くことになつてブラ下けて出る。デイスタンスのスキーも一臺餘分があつたかと思ふた。(が之は少々ハツキリして居ない)

例のマヨルステインからホルメンコーレン電車に乗つて終驛の *Fregenseiten* まで行くのである。オスローから此處まで約四十分かかる。冬の短い日脚は私達が此驛に着いた頃には薄く黄昏の暮に包まれて居た。

高橋、永田、矢澤、竹節の四君と僕と、案内役のオルセン君、ハイベルグ君と一行七人である。麻生君と伴君とはジャムブ用のスキーが間に合はなかつたと見え、オスローにもう一晚滞在したので来ない。

靴片手にストック突いて立つ矢竹君。

デイスタンススキーを穿いて、もう一組をかゝへて立つ黙弟君。

手製のリュツクサツクにシコタマ荷を入れさせられて脊負ふ高橋オトツツアン。

軽いデイスタンススキーを穿いて重い新しいジャムブのスキーを擔ぐ竹節君。

シュワイツで買つたりリュツクに、之亦シコタマ荷を詰め込んで脊負ふて、其外に重くてやり切れないキノコダツクをブラ下ける自分、まるで百鬼夜行そのものゝ感じがした。之で之から山奥へ行くと云ふんだから一層大したものだ、途中で殆んど人に出會はさなかつたから良い様なものゝ、俺達に若し出會つた人が居たらさぞ驚いたことであらう。

可成りに堅く踏みつけられて、滑り歩いて登り降りして行く處のコースは、全くミゾをなして居る。もし降りにそこを少しでもハヅれ様ものなら偉い目に合ふ程投げ出される。

此日であつたヒユツテへ行く途中で若返つてシコタマ荷を身につけた監督が可成り頑張つて歩くんだけれど遅れ勝になるので、とうとうハイベルグ君見るに見兼ねたか、しきりに背負はうと云ふけれど、否大丈夫と云つて途中でとうとう皆に同情されたと云ふか、まあ皆に迷惑をかけてもすまぬ譯で、矢竹君と特物を變へて貰つてすつかり日脚の降り切つた六時半頃、ヒユツテへ着いた。フログネルセーテンから約一時間半要した様であつた。

## シエヌングスヒユツテ

シワイツでなくつちや、ヒユツテらしい氣分が餘り味はうことが出来ないと思つて居た私達の氣持は、此ヒユツテで充分氣分の償ひが出来た。そして私達の今迄のヒユツテに對する考へ方が可成り幼稚なものであつたことを教へてくれた。

ヒユツテなどと言へば、ピンから錐まで自分達が相當食料などを用意して行つて備附けの鍋・釜を使はせて貰つて、用意してある薪を何本何錢かと支拂つて實費で泊つて來る態のもの、それが山のヒユツテと言ふものだと、言つた様な工合に考へて居た。實際本當に登山家の考へて居る、山氣分のするヒユツテと言ふものは寒寂そのものゝ様な高い乃至は遠い山奥に作られてあるものが、眞の山のヒユツテかも知れない。少くとも番人が居たり、料理番などが居て凡べての面倒をしてくれる様なものは、どうも山氣分がせず、手近な言葉で云ふとシツクリと氣分が合致して來ぬと言ひたい人も少くないと思ふ。

此シエヌングスヒユツテと言ふのは、さうした意味の山のヒユツテとは幾分趣を異にして居た。

ヒユツテには家族連れの番人が多くの女中を使用して欲するものを何でも準備してくれる。早く言ふと都會の小レストランが出店を張つて居る様である。聞けばノールウエースキークラブの許可を以てヒユツテ維持兼賄請負を業として居るものらしい。

其處には町のホテルで食ふ様なパン、バター、ケーゼもあれば、ミルク、カフェー、テイ、罐詰、魚、肉類、それからビーヤ、ミネラルワツサア、ブランドイ、ホイスキー、ワイン、何でも望み次第のものが飲めるし喰へる。そして夜になれば蓄音機の音に合せて愉快な氣持でタンツェンもやれる。寫真を見ると町へ持ち出しても大して醜い建物でもない。丸木作りで總建坪が五、六十坪位あるかと思はれる程の大きさである。

階上・階下とあつて、階下は二部屋が食堂になつて一方のは小さくて三間の二間位の大きさで、もう一つの方は四間の

五間位はあつたかと思ふ。(今記憶が慥かでない。)

そして他に家族の部屋と調理部屋とがある。

二階は全部がベットになつて居る。部屋が六つになつてキャビン式にベットの数が皆で二十八あつた様である。洗面所が階段の上り口突き當りに作つてある。

便所は母屋になくつて離れの物置きと一共に作つてある。

各部屋にストーブが取附けられてあつて、その各々の煙りが小さい煙突を通つて中央の大きな吐け口に注いで、屋根へ突き出た口から、吐き出される仕掛けになつて居た。

書き落したのが階下の食堂の内、大きい方には部屋の片隅に吸ひ込み式の爐が作つてあつて、そこには大きな薪をクベ立て、椅子に腰下ろして真赤な燃を見乍ら、談笑することが出来る様に出來て居た。此爐邊に寄つてブス／＼音を立て乍ら燃えて行く薪の影が次第に薄くなつて行くのを眺め乍ら、語つた氣持は可成り此ヒユツテに對する良い印象を受けたものゝ一つであつた。

私はこんなことを考へた。

成程此ヒユツテは、本當の意味の山ヒユツテと言ひ得ないかも知れない。餘りに設備が整へ過ぎ、そして餘りに多くの人達が訪れて來て本當に山へ來た。山の小屋に來た氣分になれないかも知れない。本當の登山専門家には向かないかも知れない。然し少くともオスローから廿何軒も離れて居る此丘に是だけ設備の完全したヒユツテのあることには、亦私達が學ぶべき事共が可成りある様にも思つた。

同時にノールウエー否オスローの街のスキー家、そして近郊のスキー家、その人達がスポーツをやる人であると否とによらず、又専門の登山家であるとないとによらず、誠に恵まれて居ると思つた。そして羨しくなつて來た。

空の晴れ渡つた日に夫婦連れで、子供を間に挟んで深いタンネンの森の中をシエニングスヒユツテを指す道標の傍に深

く切り込んだスキー路をたどり乍ら、楽しい一日のスキートウレンをやつて、此ヒユツテまで来て暫らく休んで、テイだのお菓子だのバンドの何でも欲するものに舌鼓みして、又楽しく歸つて行く人達が全く羨しくてならなかつた。

此丘に立つて眺むる景色には充分登頂で味ふ氣持があると思つた。山の高さこそ低くとも、此丘の頂に立つて都會の噪騒の内に未だ自分の身が押されて居る様な氣持は更にしない。そして此處で吸ふ空氣は亦俗塵の混つて居ない清い淨い透徹した空氣だ。此丘に立つて眼に入るものに、巷で嘔氣を催す様な醜惡な感が微塵も混つて來ない。

此處で遠見する眺望には、北歐獨特の山陵曠望の趣があつた。

何となく此ヒユツテが俗化して居る様な風に思はれる方もあるかも知れないが、決してさうではない、良い意味の善い氣分を味ふことの出来る。そして本當に楽しい家庭的の氣分のするヒユツテであつた。

私には本當の登山専門家の山岳を中心にした種々の考察などについて、どれだけの定見があると云ふ譯でもないので、登山に關しては、何も言ふ言葉を知らないけれど、スキーを中心にしてなら少々位の智識は、人から教へられ、又自分で嘗て經驗したことなども無い譯ではないから、一概に無定見を表現したくない。

私は兎に角、自分をスキー家としての立場から、冬の自然に對してこんな氣持を持つて居る。

私はず、スキー家が一樣に抱く冬山に對する氣持、自然に對する氣持が、はつきり味へれば良いと思つて居る。

私は、所謂登山専門家ではない。だから私には登山に對する六ヶ敷い氣持と云はうか解釋と言はうか、さうしたものは持つてなくとも良い。只さういう人達の氣持が理解出来れば、それで充分だと思つて居る。だから私は何時もさうした方面の専門家の言葉をよく味ひ、そして自分の心にある自然讃仰の氣持を培つて行かうとして居る。

實際、私は技巧で飾りをつけたり、厚化粧で塗りつけたりして出來上つて來る様な細工物的な考察を以て自然に接して行くやうなことはしたいと思はない。そんな意味のものでは自然が極く狭くなつて物言はぬ人形と變りがなくなつて終ふからである。

私は眼に入る凡べてを隈なく、全くフライな氣持で出来るだけ味ふ。それで充分であると思つて居る。

自然を本當に愛し、心から眺めるといふ氣持は、理屈やそして屈托や何かに捕はれて居るものではないかと思ふ。

全くのフライな氣持、アインフハツハな考察、それが自然と一番ピッタリしたものではないか、さういふ氣持で自然に接してこそ本當の自然が奥底までも、偶々までも眺められるのではないかと思はれる。

スキーといふものを介しての山岳には、又夏の山岳と可成り異つた趣がある。だから夏の山に趣味の薄い人でも冬の山に可成り引きつけられて行くやうである。多くのスキー家達は此處に楽しみを濃く持ち合せて居ると思ふ。多くのスキー家達には冬山の氣分を忘れることが出来ないやうである。

私にはホツホゲビルゲへ行くだけの經驗と智識が欠けて居るかも知れない。然し、たゞさういふホツホゲビルゲにまで延びて行く登山者達の氣持が理解出来れば良いと思つて居る。そして私は冬のスキー登山と純スキー競技とをスキーといふものを介して一つのスキースポーツの中に入れて考へて居る。そして自分では自分をスキー家であるといふ立場に置いて此二つを出来るだけ兩立させて行かうと考へて居る。多くのスキー家が最も多く進んで行くトウレンラウフは、私の解釋では第一の方に入る。

私には、純スキースポーツをやつて居る者にスキー登山が無意義だとか、所謂スキー家には、冬の登山の眞意が解されないとか、登山は山岳専門家だけに限られて居るものであるとか、スキー家の登山は、登山ではないなど云ふ様な亂暴な考へ方は到底持てない。

私は繰返すであらう。僕はスキーの與へてくれる凡べてのものを充分味つて、そしてその環境に身も心もブチ込んで自分の生命の糧として行ければ善い、それが私達の全部なんだ。

私達純競技をやつて居るものにとつて山、殊に冬の山の持つ力、そしてその大きな力が私達の内的生活にまで與へるであらう賜物は、決してく、純競技をやつて居るものにとつて僅かを享受し、そして些かを感味して居るものではない。私

達にとつても、矢張り冬の山の存在は否定出来ないのである。私は言ふであらう、優れたるスキー競技者は又同時に秀でたる技術者、スキー登山に於ても持ち、そして山が興へるであらう精神を体得し、充分山に親しみ得る人であらう。而しかる人は最も幸福なスキー家であらう。

シエヌングスヒユツテの丘に立つて遠く近く眼に映るノールウエーの山野の眺望に酔ふた私の心に、不思議な位落着きが満ち／＼て来るやうであつた。そしてとう／＼こんな餘計な事まで考へる程、冷靜な氣分になつて行つた。

日本に居てヒユツテらしいヒユツテと云ふものは、自分達のバラダイスヒユツテでの味しか知らなかつた私には、此處のヒユツテの何から何までが物新らしく又物珍らしくそして氣持よく享けることが出来た。

丁度ヒユツテに着いた晩であつた、どうだい此氣分はと、階下の食堂の片隅にあるむき出しの爐を圍んで、元氣よく燃えて行く大きな割木の紅い焔に頬を頬照らし乍ら、外國でのヒユツテの夜の氣分に浸つて居た皆の口から出る言葉は、文句なしに、良い、良いなあ。氣分が出るね、と云つた調子で、よく私達仲間が向ふで使つて居た變な言葉である。「好き好きだよ」なんて愛想の無い言葉を出した連中は流石に一人も居なかつた。

ヒユツテに着いてから種々骨折つて、ヒユツテの主人とかけ合つてくれて居たオルセン君は、もう外も眞暗くなつた八時頃に山を下りることになつて、お互に堅い握手を交して又今度の金曜に合ふことを約して別れる。オルセンさん、奥さんによろしくなんて言つて、皆で笑ひこけて別れた。

元氣な、そして此コースをよく知つて居たオルセン君は、明りも持たずにヒユツテの前の坂を一走り滑つて終つた。黒い影が森の中に消えて行く。

ヒユツテの同宿者、フィンランドの選手、監督ラツバライネン、ヌオテイオ、マツテイラ、クノツテイラの一行。ノールウエー選手が二・三人、未だ私達の知つて居るノールウエーの一流處は來なかつた。フィンランドの一行と型の様に互に敬意を表し合ふ。先方が全然何れもこれもフィンランド語しか話せないのに閉口した。監督さんだけがチイト片言ドイ

ッ語が判るやうであつた。變なもので先が自分より大したことはないなと思ふと、こつちでシヤベルことが大變樂で調子もよく行くものであることを又此處でも味はつた。無論こつちのドイツ語はブローケンではあらうけれど。此骨が呑み込めたら外國へ行くのも案外苦しいものぢやないとは正直な處私の頭に強く残つたものの一つであつた。

同宿者に相當の年配の女流スキー家がもう數日前から來て泊つて居たと聞いて驚いちやつた。夜になつて階下の食堂に下りて來て、タンツェンを見乍ら、私達に愉快に話しかけるのには今度は恐れ入つちやつた。

グラムホーン、靴の音、ホテリ切つた男女の群、それ等の笑聲赤く燃え立つ焰の色、そして薪の音、ハツキリとトボリ行くランプの明り、階下の食堂は全く和合此上なき團樂そのものであつた。

夜は次第に更けて行く、家の中も次第に靜まつて來た、窓外には微な風の音さへもしない。ノンビリとした靜かな氣分が、明るい感じのする春三月の訪づれを傳へて居る様だ。

明日はトレナーの來る喜びを胸に描きつゝいつしか、旅寢のやるせなさをも忘れて、ぐつすり寢込んで終つた。かくして本當に良い第一印象を以て私達のヒュッテンレーベンの第一日は過ぎた。

二月二十七日　ヒュッテ第二日目　晴

ヒュッテレーベンと言へば、殊に不自由の生活の様であり、そして随分落つきのない生活の様ではあるが、私達にはその不自由さとか焦燥とか、苦痛とかと云つた様なものは少しも抱かれなかつた。それ程私達は此ヒュッテで恵まれた。

ヒュッテの第一夜は誠に靜かに朗かに明け離れた。

床を蹴つて外に出れば、もう朝陽は朗かな顔をして穩かな地上を照らして居る。朝靄は次第に晴れて、僅かに遠くの山々の膚を包むに過ぎない。ヒュッテへ働きに來て居る背の高いムツツリとした感じの良い若衆が、毎日の勤めらしく大きなノールウエーの赤の十字の旗を空高く巻き上げて居た。旗は靜かな朝風に揺られて悠々と空に飄つて行く。紺地に白の廓を外にとつて赤の十字に染め出してある此のノールウエーの國旗には本當に私達は深い親しみを持つて居た。

中歐に居た頃、私達は多くの國旗を見た。その多くの國旗と肩を並べて居るナショナルフラッグの内、私達の一番感じよく親しみ深く感激に満ちて眺めたものは、母國の日章旗であつた。そしてその日章旗に次いで私達に本當に良い感じを與へたものは、此のノールウェーの國旗であつた。その懐しさの深い旗を再び此處のヒュッテの丘の上でつくづく眺めて此ヒュッテンレーベンに一人愛着を感じる様であつた。

午前十一時迄に例のオルセン君とハイベルグ君とが私達を迎へに来て、今日開催される R.C.T. スキー倶楽部のジャムプ競技會に案内して呉れることになつて、私達はそれ迄近所を滑り廻つて待つた。

どちらへ向いて滑つて行つてもすぐ森の中に入つて行くと云つた調子で、而もその森々の中がもうやがて三月に入らうと云ふ此シーズンに、紛雪でとても氣持の良い雪なんだから堪らない。

フィンランドの連中始め、ヒュッテの皆の連中が何となく私達の滑つて居るのを物珍らし相に眺めて居る様だ。午前十時頃、フィンランドの選手達は、リュックを一つ背負つて、今日の練習に行つた。トゥレンをやり乍らトレーニングをやつて来るものゝ様に察せられた。もう其頃にはボチ／＼オスローの方からトゥレンロイフェル達が、此のヒュッテへやつて来た。何だか私達が此處に泊つて居ると云ふので、特別見物旁々やつて来るらしい。そして来る連中はと見ると女連れの一行もあれば、夫婦連れ、小同志と言つた調子である。今日来た内に二十人ばかりの一隊があつた。聞くとおスローの町の Y. M. C. A. の連中だと言ふことが判つた。来る人来る人に記念撮影を所望されて、實際寫眞に顔を貸せることだけは、今度の遠征で磨きかけて来たやうな氣がした。

### ミッドストウエムへ

もうやがて十二時近くになつて、どうしたんだらう、一向迎へが来ないかと言ひ合つて居る處へ、例のハイベルグ君が汗を流して登つて来た。『Good morning』、『How do you do?』、『Guten Tag』、『Wie geht's?』と元氣で挨拶し合ふ。

早速オルセン君どうしたと聞くと、今日は忙しくて来れないと言つて居た。それから今日は是から、Midstmen Bakk-  
で、行はれるジャムブ競技會を見物に行くことになつてハイベルグ君樂々休む暇もなく、案内させられる。皆が軽々と  
仕度をして出たが、私だけは例によつて重いキーアバートをリュックに納めて着負つて行かねばならなかつた。實際厄  
介は厄介だが、折角のノールウエーのジャムブ競技ぢやないか、兎に角、機會ある毎に撮らなくては、なか／＼に撮れな  
いものだと言ふことを、つくづく經驗したから、少し位頑張ることなどは問題でなかつた。

ミッドストウエムはヒユツテから四〇分位オスロトの方へ下つて行つた處にある。ヒユツテの横から一氣に眼下の湖面  
まで森の間を縫ふて滑る。道はまるで馬橋でも樂々とやつて來れ相に堅められてあるが、然し時々粉雪が僅かに積んで  
居るので、愉快な滑走も味ふことが出來た。少し位コースが堅いことなどは大して問題ではなかつた。周りの景色が充分  
に私達の心を慰めてくれるから。途中の小高い處からあちこちに個人のや、團體のヒユツテが點在して見える。道路縁の  
タンネンの幹に赤や、青の長い紙片が結ばれて下つて居る。何時かのデイスタンスレースのコースの指標らしい。

スキミヂアムの横からだら／＼に下つて道を横へ入る處で紅顔の青年ウイット君に會ふ。元氣よく挨拶をする。彼と  
は已にイタリーの大會の時、皆が仲良しになつて居た。彼も私達を案内してハイベルグ君と共に會場へ連れて行つてくれ  
た。

### ミッドストウエムのジャムブ競技會

どちらの方からも此會場へ入れ相であるが、要處々に監視人が居て、一々入場のカルテエを調べて居た。私達は特別  
待遇で無料で入場を許された。小供がプログラムを賣つて居た。早速買求める。邦貨一圓足らず。私達圏外の方から會場  
に入つた。兩側のスタンド、圏外の廓外ぎつしり人が詰つて居た。何處のジャムビンゲ競技を見に行つてもスタンドの設  
備のない處はない。なければ無いで通るのかも知れないがシャランツェにスタンドの設備は是非必要だと、私はつくづく感

じた。入場料を取る取らないで文句を言ふ人もあるかも知れないが、シャンツエの維持費に當てる爲にも、入場料位取つても良いと思ふ。

ランディングバーンの上の方まで登つて行つた處でノールウエースキークラブの *Yorstrand* オステゴールド氏に出會つた。懇篤な挨拶を交す。例の私達へのトレーナーのことを特に依頼した。そして是非他の選手で差支へあつたらレスリガアルドで結構だから、明日来る様に話して頂きたいと交渉の結果、快よく納得してくれて、すぐ今日此競技會に来て居たレスリガルド君を呼んで明日来る様に話してくれた。

例の私の活動寫眞機を此處で勢々働かす積りで運轉し出したけれど、少し廻つてはすぐ止る。いくつか用意して行つたカゼツテを入れかへして見たけれど、皆工合が悪い。氣を腐らして撮影を中止して、黙つて見物することにした。何のことはない、夜ヒユツテへ歸つて調べて見るとフィルムの卷心が入つて居ないことが判つた。

ジャムピングヒルを下から上まで兩側すーと見廻すと、皇太子オラーフ殿下のスキー服を着てスタンドで見居らるゝ姿が第一に眼に入る。倶楽部の幹部の人達は名こそ判らないが、顔知りの人達が眼に入る。

選手ぢや、オリムピアで會つたストア、キエールボトンアンデルセン、グロツトムス、タムス、ヘツゲ、レーン、クレツベンの連中が来て居る様だ。

プログラムを繰ると、往年のホルメンコーレン競技で拔群の成績で、もう何回も續いて勝つて居るベルゲンダール、ハウグの名が出て居る。

今プログラムを見て、私達の間知られて居る連中の年齢をあけて見やう。

ハウグ、卅五才。ベルゲンダール、四〇才。グロツトムスブリーテン、二十八才。キエールボトン、廿八才。タムス、卅才。ヘツゲ、廿九才。ストア、廿二才。レーン、廿二才。クレツベン、廿才。と言つた工合である。

四〇才のベルゲンダールのジャムブの老熟振りを見て感心したけれど、それにも増して *Aksel Petstund* と云ふ黒い鬚を

生やした五十五才の老人が、卅何米飛んで立つて行くのには全く驚かされた。これこそノールウエーでなくつちや見られないなあと思つた。

飛んで來方の早いことはもう伴君が此前の號に書いた通りである。二百何十人の内で數へる位しか轉ばない様なジャムプを見て居ると、終ひには飽きが來る。之は實感である。立つことは已にノールウエー人には問題ぢやない。だから勝つ爲には、スタイルを出來るだけ良くして遠くへ飛ぶ様に努めねばならないのである。

ホルン、トランベツトを持つ一團が圏外の右側のスタンドに十數人立並んで勇壯なジャズを吹奏して居る。人氣物のトウリントラムスが、若い綺麗な人達の間にもてゝ居る有様が見るともなしに眼に入る。

天候は申分ない程暖かで風が少しもない位、見物して居る方にも、競技をやる方にも文字通り恵まれたるジャムプデイと言ふ日である。而も斜面の雪が大して融け出すと言つた譯でもない。

午後二時から競技開始、一人が二回宛飛ぶのである。アプローチ着陸斜面の修理が終るとシャンツエの上の係が小さい旗を振る、同時にシャンツエの上に居る喇叭手がブーブーと喇叭を吹く、スタートをして宜しいといふ合圖である。その喇叭の音が始めの内は少々私の耳には、大會の氣分とピツタリしない様な響きで耳底に残る様な氣がしたけれど、案外夫れも聞き慣れると却て落つく様であつた。喇叭が鳴るとジャムバアは決して逡巡して居ない。スグ元氣よくボン／＼と駆け出して來る。

アプローチの滑走は腰の低いのもあり高いのも居る。

サツツの時に兩腕を後ろに引いて踏み切るのもあり、さうしない者もある。そしてその動作をシャンツエから離れる三四米位の處で始める者もあり、スキーの長さだけ位端に近づいてから始める者もあるが、總じて台を離れて行く時には前上方に兩腕を打振つて踏切つて行く。オリムピアの時の様にアプローチのスピードもなければ、フライトのスピードも無いから割合にどのジャムバアも餘裕を持つて飛んで居た様である。フライトでは數多く振る者でも三回位しか腕を振つて居ない。

スキーは殆んど全部アメリカンヒットコリーである。大抵皆ハウグバツケンの縮具を用ひて居た。

何のジャムバアも一回一回飛ぶ毎に、スキーの裏を綺麗にしてバラフィンをゴシ／＼擦りつけて、まるで光りを放つかと思はれ位磨をかけて居る。

飛んで行く距離を見ると、少い方で三〇何米、大抵の連中が四十五米前後に頭を揃へて居た。此處へ若し日本の連中が出場したとしたら、先づ四〇まで出せるか出せない位だと思つた。此日の最長不倒距離が Klasse I. B. の Albert Norstad (20才) といふのが五十米半のレコードを出した。年は若いがなか／＼大家の様な落ついたジャムブをする男であつた。私達の見え眼にも美しい、旨いと映つた。

今日の競技會は Klasse I. A. Klasse I. B. (20才以上) Klasse II. (20才以上) Klasse III. (18才19才) とあつて、全部で二〇六名、此多勢の連中が一人二回宛飛んで二時間前後で競技を終るんだから驚き入らざるを得ない。競技者は無暗矢鱈に轉ぶ様なことはないし、役員側のオーガニゼーションが又大へんよく競技を進行させて居る。歴史が誠によく凡べてを語つて居ると思つた。

今日見た連中がやオリムピア連中が特別光つて見えもしないで返つて留守軍に光つたのが、たくさん眼についた。

Albert Norstad (20才)

Fritz Johansen (20才)

Ivar Dahl (20才)

Harald Sörensen (20才)

Roar Hellum (18才)

Storm Pedersen (19才)

Nils Klykken (19才)

Leif H. Johansen (19才)

等抜記するだけでも人材が揃つて居る。やがては此中から、第二のタムス、ルード、アンデルセンも出ることであらう。少くともノールウエーは數で而も質の良い連中で壓へて居ることが強味であると思つた。

競技の最中私達は、是非デイスタンスの世界的の偉材ハウグと握手を交し語らはうと言ふ譯で、アブローチの横の森蔭

ゴシ／＼ワックス（バラフィン）を塗つて居るハウグに聲をかける。堂々たる肉附きの良いハウグ選手はコチラを振り向いて微笑を浮べ乍ら、わざ／＼僕達の傍までやつて来て握手をしてくれた。ゴツシリとした大きな手で私の瘡手は握りしめられた。お前の名はオールボークの中で數年前から知り、そして日本のスキー界で大へん有名だと言つてやつたら、嬉し相な顔してクラツシツクな顔貌に英雄笑ひをたゞへて居た。少し彼は英語を話した。

もう一人すぐハウグと一語になつてワックスを塗つて居たもうオールドボイスの方に入つて居る選手だらう。それを呼んで私達に紹介した。それが有名なるベルゲンダールであることを其處で始めて知ることが出来た。ハウグよりは少し顔は瘡せ顔であり、体もハウグよりは良い様に見えなかつた。ベルゲンダール選手は、ハウグ時代のすぐ前に堯名をノールウエーの競技界に馳せた選手である。

私達は此二人の選手ともつともつと語りたかつた。けれど時間は之を許してくれなかつた。彼は第二ラウンドで又スタートに行かねばならなくなつた。私達一行は其處で記念スケッチをやつて別れた。此二人の超人は、各々スキーのビンディングを發明して居る。そして名をつけて、ハウグのをハウグパツケン、ベルゲンダールのをベルゲンダールビンディングと呼んで居る。未だ日本には此二つのビンディングが左程多く使はれて居らず、又名も餘り知られて居ないが、ノールウエー、中歐方面のスキー界殊に競技方面では、此二つのビンディングが有名になり、最もよく使用されて居ることを私達は今度見ることが出来た。

競技が済んでから、再びハイベルグ君に案内されて、スポーツレストランに行つて茶とお菓子に喝を慰し、暫らく休んで夕方ヒユツテへ引き上げた。

### ヒユツテへ再び歸る

伴君と麻生君とはもうヒユツテに来て居た。やあ／＼の挨拶で此處に第二日目のヒユツテンレーベンが一層賑かになつた。

部室の都合で僕は一人別の部室へ移された。ヘツゲ、ストア、レーンのオリムピアで顔馴染みになつた連中に、今度のホルメンコーレンに出ると言ふ若い選手が二人だ。何だか壓へられる様な気がしたが、止むを得ない。連中夜食堂に下りて来てヒユツテの妻君や女中相手に盛んに踊つて居た。もうすつかり馴染みなんだから止むを得ないんだらう。「是位のこととは。」と思つた。

寐様と思つて部室へ歸つて来た處、ヘツゲ選手が何だか變な平たい罐を開いて居る。何だと思つて傍へ寄つてよく見ると嚙み煙草である。煙草やアルコールを喫することは向ふでは選手と言はるゝ位の連中は、決して表立つて使用して居ない。そして煙りを吹かして居ると、他の連中から、やつけられるらしい。それで煙りの出ない嚙み煙草を嚙むらしい。随分亂暴だと思つた。私にしきりに嚙んで見れと勧めたけれど斷つた。何しろ唾が出て仕様がなないと、穢いのと齒が眞黒か眞赤になるんだからたまつたものでないのである。

床へ入つたのが十一時過ぎ、ヘツゲが私と足を背中合せにして寢て居る。僕の上にレーン選手、ヘツゲの上にストア選手が寢て居た。ヘツゲが足で僕にからかう。僕が又負けずに蹴返すものだから面白がつてしばらくカラ、かッて居たが、とうとう終へに向ふで音無しくなつた。そして私がノーウエー語の單語でマングークがゾングークなんて言つてやつたら向ふで月曜から日曜まで一週間の呼び方を教へてくれた。私がノールウエーのダーメが美しいと言つて賞めてやつたら向ふもお世辭か知らないが日本の娘も綺麗だなんて言つて居た。こんな一流の連中と泊り合せて居るんだから、いろいろな事を聞くのには又とない好機會ではあつただけれど、相手が全然ノールウエー語しか話さないもので、全く借いことをして終つた。つくづくもう少し前からノールウエー語を勉強して置けば良かったと思つた。レーン選手はオリムピック以來靴、ズレ、で閉口して居るらしく、休む前に沃チンを塗つて手當てをして居た様であつた。

狭い部室の中は、晝の暖みに加えて女中さんが馬鹿に薪をク、べて行つたと見えて暑くて仕様がな位だ。一度床に入つたが又起きて窓を半分明けて再び床に戻つた。頭のガラス窓を通して晴れ切つた空から下弦の月光が差し込んで来た。

## 丘への生活

生活の断片的なメモが私達の自然の生活に、私達の若い日をか  
たみづけてくれれば幸である。

### 1. 影

荒野を越えて行けば登音は響く、  
地の底から暗く湧いて随いてくる。

(テオドル、シユトルム、荒野を越えて。)

躍りたい魂も人生には冷い眼をしたがる。人生はあまり  
にナマあたゝかいからだ。

山の有する陰鬱は濃すぎる。静かすぎる。

氷れる情熱。理性の感情。

明又滅。滅又明。

高き情操の生命があれ。

放浪の交響。

ぬけがらに見出した魂の生々しさ。こゝにはミイラも火  
の如く燃ゆる。

さあ、行かう。

丘から、山懐へのトロッコが心にしみる。

足が躍りだす。左様なら。

人生から一つの火花が消えた。

### 2. かへり

汝は晨朝の露き散したものをあつむ。

羊を集め、山羊を集め、

母の懐に稚兒を歸す。(サツフオ)

「おい」

「うん」

ヒデがニヤリと笑ふ。晩秋も十月の末、二人で北見峠を

越した歸り道、明るいセビヤに浮いたオコツクの海に心を

やつたのち、名寄で函館棧橋の汽車に乗つた時だ。

私達の側に、幼兒を揺る母、そしてかすかにもれてくる

子守唄。

天鹽岳の新雪をくろき木の樹海を越して望んだこと、峠

の驛遞の好い爺さん、媪さん。國境標の白樺の光、北見は奥白瀧の荒れ果てた耕地。石狩の國に賣らるゝとて、脊中に一杯陽をうけて峠路に向ふ何十頭かの馬。二日つゞいた月明の郷。

輕い疲れと亢奮の後に、旅の豊満な氣持が、想影のとりいれを始めやうとする時、この子守唄。この子守唄。

「おい」と呼べば

「うん」と答へたまふ

ヒデがもう一度ニヤリとした。

### 3. 國後乳呑路

死が、もし、かゝる山や溪の間に自分を自由に放つものであるならば、寧ろ死こそ自分には望ましい。

もう歩いて來た道が見えなくなつた。それもよい。

これもよい。

(怪奇美の中、アルプを仰いで)

枕に交ふ夜毎の潮。

それは幼き日の湘南を懷はせ勝であつたが、朝のうするゝ窓を開くれば、いつも銀鼠にぬりつぶされる霧の日がつゞく。

爺岳チチエスツツの麓、乳呑路チチノミチの丘。

翠嵐と磯風に、醸されゆく旅の心。

色圓シヨクの化ける日(色丹島が幾つにも縦の線に切れて見える)放馬の牧場に、山から歸る日、人達は「暴風雨」を想

ふて磯舟をあけ、昆布を納屋におさめる。

さみしくてたまらない時、岩に立ち壽にあはせて出駄羅目しやべる。

馬鹿馬鹿奴他人でもなし自分でもなし腹立ちて誰れかを罵る。

さみしさに沖を眺めて居りたれば俺の眞似する小犬ありたり。

と、日記に書きつけてくれたのは、若いその村の△と呼ぶ先生であつた。浪の高くなつてくるたつ方、私達はよく黝クずんでくる海をなつかしみながら、磯にやつてきた。さうして、だまつて海を凝視ニギミめては、時々海に石を投げこんで來た。

### 4. 小別澤の峠

山のあなたの空遠く

「幸」住むと人のいふ

噫、われ人と尋めゆきて

涙さしぐみかへりきぬ

山のあなたになほ遠く

「幸」住むと人の言ふ

(カアル、アツセ)

「おい、お前の繪を描く氣持は」

「おれかい、おれのはね、春になつて芽がふつくり芽萌えるだらう。あの時の氣持さ」

こゝは小別澤の峠の頂。

今ゆらぐ陽炎の光り。遠山に霞む残雪の香り。

黒土。黒土。

彼等のスプールも、雪と氷の戦も。……

大地への心のときめき。

大空へ胸のねがひ。

炎に澄むだ命を愛づる、

生れながらの牧羊者の様に、

トロは情熱の瞳の所有者だつた。

5. 三 月

はてしらぬ

空の天井のその下で

はてしらぬ

空の天井のその下で

星の踊りのひとをどり

(ジュエアル、ラフオルグ)

科學つて?

藝術つて?

陽あたりの好い三月の午後、水がめにしのびよる藍青のよろこび。ダツチョウは心持ち悔いた氣持で、うなだれた友達顔をのぞきこむ。鉢植が何になる。籠の鳥が何になる。と彼がつめよつたのは三日前のこと。そして眼は多少憂鬱に、今彼は空になつてゐる鳥籠をみつめてゐる。

「あの小鳥どうしたのよ」

「鳥かい」

少しく悲しげに、その友は微笑を含ませて、

「小鳥かい、鳥は逃げ出したよ。でも鳥に喰はれたかもしれない」

真白き陽光はちまたを涉り、金魚賣が街を流してゆく。

6. 十勝トツタベツ川

しかあれど、われは命の熱き味を知る。

この我小さき瞳にも

たゞ稻妻の束の間に

久遠にわたる光明は映りたらずや

われも亦聖なる宴に列りて、わが歡樂を飲み乾しぬ。  
また何の望かあらむ。

われは生きたり。

しかしてわれは死なん。

(フェルナン、グレエグ)

トツタベツ川のせうらぎは依然として強い。

溪谷に這へる狭霧は仄黝き影をひきつゝ深き潭をよどませる。いつか夜が来てしまつた。焚火に、さつき水元がこしらへたフキ小屋だけが浮彫りになる。

三四人ぐるとその火をめぐつてゐる。水元(六十才位のアイヌ)は黙々として煙草をのんでゐる。原人の塑像に魂を忍こんだやうな彼、カムイに捧ぐるひとときをいとむが如く、皆もだまつて蹲る。

静中の動。

動くよと見れば彼の微笑。胸中にひらめきしは寂愁の荒野に熊捕りし日の思出か、音なく横はる、雪と氷の山への若かりし日のアイヌの誇か。針葉樹の海へのつきさる懐か知らず。知らず。

トツタベツ川の水聲だけがががえ渡る。

## 7. 日高襟裳岬

祈りのある自然とは、心の山河の天恵的な姿相である。

それは寛容と恩寵と思慕によつて開けるところの新鮮にして生活の内なる無限の世界である。

(心の山河)

親潮の長の旅路が、岩礁に泡沫と散り、閃光的に時限を刻む燈臺の灯に、潮のむせぶ所。

日高襟裳の岬。眞夏の眞晝。

そこらあたりは一帶の草原をなして、ガンガウランが處々に黒燿の實をつとつてゐる。

十勝の山旅を終つてから、所々の溪谷に寄り、或時は、開墾地の土新らしい香をかいで、曠原の夕暮に思ひきりひたり、かくて狭霧降る廣尾の港に出で日高路に二旬に餘る旅はつゞいた。昨日は日高馬に乗り、猿留から庶野に、そして牧柵の豊醇な上歌別に一夜の宿を借り、今日はこゝに空気に綾があり、大空に光が降る。

手は群れ、ゆるやかな丘陵の線に浮いて草を食む。

大洋は憩ふ。

白雲の燈臺は眠る。

尊敬すべき旅伴、ボンチャンは上着のボタンをはづして眼をつむり、長々と、我側に仰向けにねてゐる。

## 8. 千島得撫島

こゝろの山河は藝術の聖蹟である。その山河の姿は、なんと簡素にして、深みのあるものであらう。穩かにして情緒のなかに、ひたつてゐる。こゝろは、喜びの中にあつて「心の風景」を前にしては嘆き、喘ぎをといめかねる。永恒の故郷に對するノスタルジヤであらう。(怪奇美の中より)

霧の王國、早瀬に洗はるゝ千島の瀬戸。

しみこむ憂鬱さが、むつつりと海鳥の頭に浮びあがり、洗禮された孤愁が、ラッコの姿に、ゆつたりと漂ふ。

千島の風物は灰色の泉に浴みしつゝも、澄むだ銀色の透徹をたゞへてゐる。

後國、擇捉は未だ入口、旅はウルツプ以北から。弧島的に濃厚な怪奇的の風貌を、千島がおびてくる。

知る人ぞ知る、そこにI號と云ふN省附の機艇が動いてゐる。乗組員は艇長共六人。その主たる人は、オットセイ保護以前に北の海を舞臺にラッコボートの「生命詩」を描いた人達。

俺がとも言はなければ、ウンともスンともなく、平和な笑を浮べて接したウルツプは小舟の清澄な初秋の朝。

忘れかねたるや海の味。

オットセイ、ラッコ、又はトド。

一年の夏を、此處に送らねば心やみがたき大洋へのノスタルジヤ。

夢に包まれた海の臥床を慕ふ彼の人達はみんなひとり者であると云ふ。

## 9. 牛の骨

空から吹きをらす無邊の風が言ふ。

「おい、う、馬鹿も好い加減になさい」と。(上田敏譯詩集)

「珍果M合ていふのを考へたんだよ」

眠つたと思つたオキが(彼は天性的なウワンダラトであつた)突然云ふ。寢返りをうつて、

「どんなのだい」と聞く。

「新年の新果だがね、盡くミルクから材料をとるんだ。」

「形は丸く軟かで」

「少しは辛いのかい」

「うん、甘いんだ。そして中心が少しく硬いのだ」

「それで、十個の箱入値段は廿錢」

「今日丸井の應接間で箱の圖案を考へたのだがね、全部

笑つてゐる中の首をならべてそして中にMと書く」  
一昨年の暮だ。俺は瀧川の工場からどんなチンカが出来  
るのか、そして可愛い嬢ちやん坊ちやんの口から「モウ  
は丸くて甘いね」と云ふ街頭の聲を一日も早く聞きたかつ  
た。

幾日待つても、珍菓は、あらはれなかつた。その代り  
「それはさうと一望はおろか、あるものは只一筋の道、  
一本の道が天に連つてゐる。それだけ

これがアルゼンチンのパンバ地帯の農場、  
淋しい感じだ。木も草もないと思はれる程、そして到る  
處、牛や馬や羊の骨や鬮がころがつてゐる。」

シルバリーヴスを入れてアルゼンチンから、私の手元  
へオキの手紙が入つた。珍菓Mも面白いが、南米は尙悪  
くないなと苦笑せざるを得なかつた。

#### 10 アルバータの友

神のお許に依つて  
わたしの一生が  
軽い旅の汗に濡れつゝ、  
此のやうな朝旅であればいいが！

(エドアルド、メリーケ一人旅)

死、それ程の魅惑があらうか。  
死、それ程の冷感があらうか。  
死、断定と否定のこれ程美しく、冷く躍るものがあらう  
か。

死を期しての、賭しての登高。

純な本能の輝きよ。

生命の三部曲。天才と馬鹿との抱擁。

「おい」友達の眼は光り出した。十二時も過ぎてゐる。  
雪の降りつもる夜だ。四疊にも等しい室には寢臺が一つ無  
造作におかれてゐる。二年振りのユキチャンとの會見、彼  
はアルバータのヴェースキャンプで、死の登行の前夜にし  
たゝめた手記を俺に示してゐる。

死ぬなら大理石の墓に若い日を刻まうよ。氷河は好い石  
材だぜ。岩壁はよい盛土だよ。彼の日に焼けた頬は語る。

みはてぬ夢か、ユキチャンは札幌を去つてから、三月で  
シンガポールに行つてしまつた。そして一年目に南の便り  
を風にたよらせてきた。

「四五日前の日曜には、デヨホルの二千尺許りの山へ  
リュックサツクに御馳走を一杯つめてかつぎあけた。馬來

半島の南端を一眼に見て、とても氣持がよかつた。熱い紅茶を啜りながら、マラッカ海峡の大きな入道雲をみてゐると、自分が何處にゐるんだか呆んやりしてしまふ。」

見果てぬ夢可なり。よし、霧の如く消えゆくとも。夢深々と美しくあれ。人みな旅人なれ。

かくして人生は、夢より夢の間に埋れよかし。

11 神經衰弱

「まだわからなかつたのだ

何處へゆくのか

何を思つてゐるのか

でも、私は

一瞥が極りなく湧き出るのを現た。

(若さへの憧憬、ヨセフ、フオン、アイヘンドルフ)

永遠に會へぬものを悲しまうより、永遠に會へるものを訪ねてゆかう。

永遠の若さ。考へない少年の日。

自由と眞實の中に、高らかに歌ふ心臓を愛でんがため。

甘酸っぱい人生の流れに、あきたなら、冷い淡白な自然

の泉の畔に戻るが好い。

何の愛憎もなく慰安もないが、汲めばとて盡きない泉が

其處に秘められてゐる。

「自分を知るのは、知り過ぎるのは一つの神經衰弱なんですよ。」

「それちやこゝに一群の神經衰弱の群が。」

「さうくたしかに山岳部の一部はそれですね。」

「みんなさうとも見えませんのにね。」

「いゝね、神經衰弱でいゝんです。自己を知らない健康な人々よりは、むしろ自己を知る神經衰弱者で私達は満足なのです。」

ストーヴは燃える。

吹雪が一しきり窓にざわめく。

どこからか馬橋の鈴の音が流れてくる。

## 12 北見斜里

見る爲めに眼を閉ぢるとは決して不合理ではありません。

また故意に神秘的な言辭を弄したのでもありません。

(心の潮)

放浪、放浪十年にして、やつと旅の味が出だした。

斜里岳から吹き下ろす風が狂つてオコツクの海に迫れば

オコツクの海は白い穂頭に憂鬱の瞳を投げ散らして、勝鬨

をあける。

生の狂踏から、死の魅惑へ？ 否、否。

それよりも片々として、よるべなき旅の弧愁が、粉々にうち破れんとし、大空に舞ひあがり、大地にたゞきつければ大洋にうちのめされる苦離苦行のひしめき、そして、ひしめきにうまるゝ原始的のよろこびである。

天よ！ 地よ！ 海よ！ 山よ！ 人よ！ 夜よ！

風に燦く光、水平線に近寄る心。

「北海道の風物は毒物ですよ。殊に單調にして單調にあらざる海岸線はですね」と横さんが言はれた言葉。

「さうすりやあ、私達は結局その中毒患者の様なものでせうか。」と私達の答。

それは過ぐる日の晩秋、初雪の日の幌都の思出であるが今、生新らしく、私の心によみがへる。

毒物

されどその毒物のかけより来る奇しき遊化三昧的感觸、北見斜里の初春を、夜は杞樽にうめきつゝ、狂ひつゝ更けてゆく。

## 後記

七月廿七日。愈々夏のオリムピアデーの幕開く。

七十有余ヶ國の勇者田園の地、そして詩の國オランダに平和の戰鬪の爲集ひ寄る。

五十有余名の日東健兒祖國の爲に奮闘しつゝあり。

吾等遙かに勇者の健康を祈りそして奮闘の消息に接せんとす。夏來る。海に山に。日に／＼都人士巷塵を避けつつ閑寂透徹の日を送らんとするは甚だ可なり。されど深山幽谿の地、透徹の氣溢るる海濱の地、徒らに都人士の風潮に俗化すること近頃甚だしき由。巷塵を避けんとする人達に順郷の心あつて欲しい。

近頃登山遭難事件、頗々なるは斯道の爲痛恨に堪へず、登山者の不用意、不注意はさること乍ら、一方事件の明るみに傳へらるもの漸く多き故にあらずや。世間は斯程に登山趣味に目覺めつゝあり。靜かに登山の本義を繙きたし。(K生)

岡村源太郎遺稿集

スキー・スタスイデー・キス

三ツコ 三頁・定價 二圓

吾國最初の萬國オリンピックのスキー派遣選手の一  
人として雄々しい活躍を期待された彼だった。彼の日  
頃の血の出る如き体験から出たデイスタンスレース並  
びにスキーに對する研究は當然一冊の本に編まるべき  
であつた。只遺稿集の名を冠せなければならなかつた  
のは何とした運命であるかと思はれる。

さうしたこの集には、彼がスキーに志して以來の貴  
重な研究を「スキー・デイスタンス・レース」なる題  
名のもとに全部網羅した。スキー・レースの走法、練  
習法等々のレースに志す人は勿論、又急速に進展しつ  
ゝあるスキー界の歴史に興味を持たれる人、否スキー  
に愛を有せられる凡ての諸氏の御読み下さる事を希望  
する。

「彼はスキーを愛しスキーに生きた。」

三月下旬出版の原稿集の都合により、定限の出版日近々  
に急ぎ至る出版係宛に申す。お急ぎに出版日近々

札幌市北二條西五十丁目

山とキス出版部

振替口座八四九五番



SKI HEIL

スキー  
ト

其用與全般

中野商店

スキー即スバ

第一  
新 製  
大 愛  
産

札幌



テ於ニ會覽博藝工產畜回二第  
領受牌金賞等一



# 靴一キスと靴山登

角目丁四區郷本市京東

## 店靴屋田太

番二一七四小話電

番七二一六京東替振

GET SUPERFINE SKEES.  
 AND MAKE AN  
 EXCELLENT  
 RECORD!



具用其ト一キスルナ秀優

樽 小

店 具 動 運 屋 梅

◆山とスキーの會は北海道帝國大學文武會スキー部の有志が、此の雜誌を發行する爲に作つてゐる會です。

◆スキーを研究せられる人、登山に興味を持たれる方が一人でも多くお讀み下さることを願ひいたします。

◆山岳及びスキーに關して何なりとも御寄稿下されることをお願いします又印畫の御惠送を切望致します。原稿紙は御申越次第お送り致します。

◆原稿は、。を一字とし、行を更めるときは一字下けること。

◆記事中の數量は全て、C・G・S・系によられん事を望みます。

◆雜誌代金に就て一應下記の諸項を御承知下さい。

◆本會より發する電信略號を「ヤマ」として居ります。

◆前金切れの時の御知らせは最後の分の包装中に同封して御送りします。次の御送金あるまでは配本を見合せます。

### 定 價 金參拾錢

\*前金御申込か、現金でなければお渡しいたしません。

\*御送金はなるべく振替にてお願致します。

\*六冊分前金拂込の方には送料を頂けません

\*前金の切れた時の御知らせは最後の分の包装中に同封して御送りします。次の御送金あるまで配本を見合せます。

\*本誌は營利的の刊行物ではありません。紹介、縁故の有無にかゝらず雜誌の代價は頂きます。

昭和三年七月廿八日印刷

昭和三年八月一日發行

(毎月一回一日發行)

編輯者 小 川 玄 一

印刷兼 小 川 玄 一

發行者 北海道札幌市北一條西二丁目

印刷所 札幌印刷株式會社

北海道札幌市北二條西十五丁目

發行所 山とスキーの會

振替水櫃八四九五番

La Gazeto  
de la  
Monta kaj Skia Clubo  
No. 84. agosto, 1928. Sapporo. Japanujo.

大正十三年七月二十七日第三種郵便物認可  
昭和三年七月二十八日印刷  
昭和三年八月一日發行



山とスキー

第八十四號

定價金參拾錢

美滿津特製  
"春より夏へ"の運動具!

合名會社 美滿津商店 東京・本郷  
赤門前  
電話(小石川) 八四五・二〇七一